

早坂鳳城師を偲んで

石川 浩 徳

現代宗教研究所の元主任であった早坂鳳城師が五十歳の若さで生涯を閉じた。平成二十二年十月十一日のことである。私が師の遷化を知ったのは後日のことであった。知人から知らされてまさかと思えない思いであった。病気の治療のため医者にかかっていることは本人からも聞いてはいたが、命にかかわるほどの重症であるとは思ってもよらなかった。十一月に入って、師の霊前に法味を上げたいと思い、名古屋市の常唱寺を訪ねた。あいにく留守だったので本堂の入り口の外で法味を捧げ回向して帰って来た。

鳳城師は、兄の早坂鳳晃師が住職をしている常唱寺に寄住の身となっていたが、同市の守山区に建立した新寺の順正寺住職でもあった。早くから現宗研の研究員となり、活発な研究活動をしていた。その頃は今は亡き石川教張師が所長を勤めていて、学究派の師は石川師に見い出されて研究員となったのである。私が石川教張師のあとを承けて第十代目の所長になって間もなく、早坂鳳城師を研究所の主任として迎えた。前所長の石川教張師の推薦もあったからだ。師は宗務院の第二庁舎にある宿舎に寝泊りして出勤していた。そのころ現宗研だけは本庁舎から五分ほど離れている第二庁舎の二階に研究室があり、師にして見れば、同じ建物の中に宿舎と研究所があったので出勤は楽であつたらう。真面目で研究熱心で主任として所長の私をよく補佐してくれた。言葉も丁寧で信頼して仕事を任せられたし勤務を

休むこともあまりなかった。そんな師であったが、その頃から時折病院へ行っていたのを私は知っている。体調が決して万全ではなかったようである。

しばらくして、師の岳父（師僧）が遷化された。その本葬には私も名古屋の常唱寺へ焼香のために参席した。その折、師は年老いた母と兄の鳳晃師の二人で寺の法務を行っているが多忙だし、自分も別に順正寺という住職寺があるので長くは現宗研に勤めていられない、ともらしていた。

主任の役割は多岐にわたっている。現宗研は研究・調査機関である。主任自身も研究課題を持っている。そのうえ行政的業務もあり、年間の研究調査項目に応じて予算の折衝から執行の日程計画、研究課題の進め方に至るまで、所長の私の指示を受けて具体策を練らねばならぬ。実に繁忙である。研究所は顧問をはじめ、嘱託、研究員等、併せて約五十名の所帯である。研究、調査の分野も広く、宗務総長の直属の諮問機関的性格のある部署だけに緊急性も要している、宗門の布教伝道の運動方針を見据えての研究が必要である。

一年に一度開催される中央教化研究会議は、全国から集まった教師による研究討議をする場である。その全体の討議課題や構想の大枠は所長が定めるが、講師の選定交渉、会議の進め方等、定期的に開く顧問・嘱託・研究員会議で討議して内容の充実を期すのは主任の力量にかかっている。また各教区での研究会議への出張も主任として果たさねばならない仕事である。年度末までには年間の成果をまとめた「所報」を出版する大仕事もある。研究所自体実に重要な役割を担っている中で、主任の肩にかかるウエイトは相当大きい。真面目で几帳面な彼は神経質なほどそれらについて気を配り、夜など眠れない日もあったようである。

結局、師は在任約三年で、体力や病気のこともあったようだが常唱寺の法務多忙を理由に主任を辞した。主任を辞した後は、現宗研の嘱託として研究調査に尽くしてもらうようになった。師の研究分野はとりわけ日蓮正宗創価学会、石山教学に主眼をおいていた。その研究成果は現宗研の所報にも見られる。例えば『六巻抄』の構造と問題点』と

いう主題のもとに、四年を費やして石山教学の中心人物である堅樹院日寛師が著した「三重秘伝抄」「文底秘沈抄」を批判的に論明し、日蓮本仏論の論理・論点の誤りを正している。

また「現代仏教」誌の私の意見欄にもよく自説を載せていた。例えば「少子化対策こそ急務」とか「臆するなかれ中国の牽制に」等と題して時事問題を探り上げて論じていたりした。

現宗研の主任の役務から解放されて自由になって、むしろ研究意欲もわき、自分の専門知識を世に問う事ができてよかったのではないか。日蓮教学発表大会や現宗研が主催する日蓮宗教化学発表大会にはよく発表していたし、化学では今年も早々と『法華経』『立正安國論』と民主社会主義、一特にリベラリストの為に」と題して発表を申し込んでいた。残念ながら急逝のためその機会は失われてしまった。

私が所長を辞した平成十四年以降、早坂師からよく電話がかかって来た。そのほとんどが研究所にかかわることで、研究・調査への意見であった。病気の方もかなり進んでいたと思われるが、自身の体のことは私には一言も触れたことがなかった。電話をかける相手は私ばかりではなかった。師と親交のあった人に聞くと、三日に明けず引つ切りなしかけていたようだ。しかも元気な声で結構長電話であった。

こうした様子から、まさか命にかかわるほどの重病の身となっているとは私は気がつかなかった。だが、師の病状については後任として主任になった影山教俊師をはじめ、親交のあった人には、師自身が直接癌であることを打ち明けていたようだ。知らなかったのは私だけだったのかも知れぬ。

晩年は、常唱寺が京都大本山本圀寺の別院でもあり講師として定期的に講義を受け持つことになったととても喜んでいたし、日蓮宗勸学院では志学の称号を有していて将来は講学を目指して頑張るとも言っていたが、それもかなわぬ志となってしまった。昔から天命を知るといわれている五十歳を一期として人生の終焉を迎えたが、師は師なりに燃焼し尽くして逝ったと私は思う。